

教員活動状況報告書

提出日： 2024 年 2 月 15 日

所 属： 獣医 学部 動物応用 学科

氏 名： 菊水健史 職位： 教授

役 職： 研究推進支援本部長、ヒトと動物の共生科学センター長、他

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト（必修，選択）
（受講者数）（学部向け，大学院向け）（學理データ活用）

教師として何に責任を負っているかを明確にし，自分が担当している授業科目に関して
数行で説明する（分量の目安：2～5行（80字～200字）（科目表以外））。

※分量（字数）はあくまで目安ですので，超えても構いません。内容を優先して下さい。（以下同じ）

動物人間関係学：動物人間関係学は、動物応用科学全般の基盤ともいべき学問である。イヌなどの伴侶動物やヒトの生活を支える家畜動物、それら動物たちとヒトとの関わり方について歴史的背景とともに理解できるように工夫する。さらにその動物種ごとの生理的ならびに行動的特性を学習し、適切な動物との関係性のあり方について考察できるように学生に自主的に学んでもらう。今年度も動物との個人的な過去を振り返り、その中でもった疑問を文章化し、その問を深める作業を取り入れ、アクティブラーニングの要素を増やした。また最終レポート内に自分の想像するヒトと動物の共生のあり方をイラストにしてもらい、絵→文、文→絵と操作することを、『媒体変化』を取り入れた。

介在動物論：ヒトと動物の共生は互恵的関係を構築してきた。この一端が、医療場面などにも活かされつつある。ヒト医療場面における動物介在療法の利用対象となる個々の疾患の概要およびその治療法と介入方法の例を学ぶ機会を与える。そこから「なぜ効果があるのか」の議論の道筋を見出すための知識を、最新の論文を読み解くことで身につけ、今後のヒトと動物の共生を考察してほしい。基礎となるヒトの疾患や身体機能を紹介したのち、そこにおける動物との関わりがどのような変化をもたらすかの詳細を質問形式で講義した。今年度も動物介在療法が医療に取り入れられるかどうか、そのためには何が必要かを、課題とし、社会的課題を言語化させた。

動物人間共生論：「動物人間共生論」は、動物応用科学全般の導入学問として位置づけている。「人と動物の関係」の歴史全般を知り、将来の展望を切り開く能力を身につける。最古の仲間（家畜）であるイヌなどの伴侶動物、ときには「有害」になる野生動物、さらにそれら動物たちとの関係を歴史とともに理解し、家畜の有用性を考え、また動物たちとのより良き共生を可能にする能力を身につけ、この先4年間の修学意欲を高めることを目指す。今年度も学生がなぜ麻布大学、なぜ動物応用に来たのかの原点を、動物学の中に見出す工夫を取り入れた。また修学が足りなかった学生には、自分の自慢による自己肯定力の向上、点数が足りなかったことの振り返りと、後期以降の取り組み、3年後の自分像を記載させ、修学キャリアの向上をはかった。

地球共生系サイエンスワーク：研究によるヒト社会、動物関連領域の発展は人類の発展に必要不可欠である。その最先端の研究を自主的に学ぶ場として提供する。本学が平成28年度に選定を受けた私立大学研究ブランディング事業「動物共生科学の創生によるヒト健康社会の実現」の研究成果を理解し、これら研究成果やそのプロセスをアクティブラーニング的に学ぶことで、自らの卒業研究や「地球共生」にどう生かしていくかを考える力を身につける。今年度は参加学生がおらず、開講しなかった。

乗馬応用実習：馬実体験を介した心身への影響を測定し、その解析方法と効果を測る科学的手法を身につける。決して技術論に落ちず、データサイエンスの素質をもって、ヒトと動物の関係性を明らかにする仕組みをいれる。興味のある乗馬を通じたデータサイエンスの修学として成功したと思う。

科目名	学科・専攻	必，選， 自	配当年次	受講者数
動物人間関係学	A	必	2	150
介在動物論	A	選	3	75
動物人間共生論	A	必	1	174
地球共生系サイエンスワーク	全学	自	3-4	0
乗馬応用実習	A	選	4	32

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

1. で説明した教育面での責任を基にしながら自分の教育理念に基づいて自分の教育アプローチについてまとめる。（自分の教育アプローチの説明：なぜやっているのか，自らの信念，価値，目指すもの）（分量の目安：8～12行（320字～480字））

教育機関の役割とは、「自分一人で生計を担える自活力」をもつ学生を輩出することである。そのためには、学生が根気強く粘り、食いつき、仕事を自分のものにする姿勢を身につけることが最重要の要件といえよう。この「自活力」は、快適な学生生活や受け身の授業実習では得難く、また学生の満足度だけでは計測不能である。学生が成長を遂げたと実感できるのは、自分自身の力で困難を乗り越えて成果を得た時と言えよう。このような自活力は、研究を通して最も効率的に獲得できる。学生は研究という答えのない未知の領域に入り、自分の力のなさを知り、その中で自分の力で答えを見出す、という実践経験を得て、そして初めて成長を遂げることができる。特に大学は高等教育機関であり、科学的な知見を基に、自然界をなりたらせる原理原則の理解と人間社会への貢献を果たす責務を負っている。そのような科学的課題を実践的に学生にチャレンジさせること（教育）、そして成果を社会還元すること（研究）、これこそが大学の高等教育機関としての役割である。この高等教育機関がもつ理念について、教育場面において展開する。具体的には「学生の学問に対する興味を高める」「減点方式ではなく加算方式を取り入れて、アクティブラーニング的要素を取り入れる」「双方向性を重要視し、授業中に学生に対する質問を多く投げかける」「成果物の良いものを例として出し、欠点指摘ではなく、優秀点の評価型とする」を通して、学生が自主的に学び、自分の興味を追求できるようにする。その中で、データサイエンスやサイエンスリテラシーが次第に身につくように工夫する。これを通して、答えのない実社会で、臨機応変に対応して、自主的に作業し、成果をだせるような人材育

成を目指す。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

教育の目的と目標（これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法）（分量の目安：15～24行（600字～960字））

「学生の学問に対する興味を高める」

初年次教育において、最初の導入では「なぜ麻布大学にいるのか」「どうして動物応用に来たのか」を自問させ、それを深掘りし、10の層まで探求する。これにより自分の歴史を振り返りつつ、現状に至ったプロセスを理解してもらい、今後の教育への姿勢、自ら学ぶことへの意欲を培うように工夫している。

「減点方式ではなく加算方式を取り入れて、アクティブラーニング的要素を取り入れる」

ポートフォリオの理念のとおり、自分の経験はすべて加算型である。自己の歴史を振り返れるようにするには、積み上げ式の評価が適している。昨今の日本の学生の自己肯定感の低下の一因にも、厳格な評価と減点方式が指摘されており、これらの改善を通して、自己肯定感が高くアクティブラーニングを自ら進められる学生を育てる工夫としている。

「双方向性を重要視し、授業中に学生に対する質問を多く投げかける」

自発的な（アクティブ）修学活動に対して、できるだけリアルタイムに応答することで、学生自身の強化学習の効果を高める工夫を取り入れている。

「成果物の良いものを例として出し、欠点指摘ではなく、優秀点の評価型とする」

欠点を指摘するのではなく、優秀な点を見出し、それを褒めることでのアクティブラーニングの強化と、強化学習の効果を高める工夫をしている。

アクティブラーニングについての取組

上述の通り、学生自身が課題に対して調査し、課題を提出するなど、多くの座学科目でアクティブラーニングを取り入れている。実習においても、技術習得に加え、課題や目的を設定させ、その目的から、理論仮説、作業仮説の設定、データの解析、考察を自らが実施しており、深いアクティブラーニングが実施できている。

ICTの教育への活用

授業中に出す課題に関しては、その場で提出を求めているため、すべての学生がPCを用いて参加することになる。コロナ前はPCルームでの授業であったが、コロナ後も同様の内容である（ただし、締切日を延長）。また実習においても、データシェアリング、解析の共有、スライド発表もすべてオンラインでできるように指導し、ICTはフル活用している。逆にICTを使わない授業、実習はやっていない。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の目安：15～24行（600字～960字））

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

（①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください）

①教育（授業，実習）の創意工夫（A～C）：A

②学生の理解度の把握（A～C）：C

③学生の自学自習を促すための工夫（A～C）：A

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）：A

⑤双方向授業への工夫（A～C）：A

上記の通り、②を除く点は充実化させてきている。②の学生の学力の把握は、課題提出からある程度の把握はできているものの、その変動を個々に調べ、学生の成長としての評価はできていない。こちらはLMSの改修を経て、個別の学生の成長を示す、修学カラーマップとStepGPAが稼働し始めてれば可能と思う。今後、教学IRとしてこの点を支援していきたい。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科，M 学科の教員の方のみ記載してください。）

該当せず

5. 学生授業評価（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

難しい単語は、平易な言葉で再度説明した。

不明な点がないか、都度学生に意見を求めるようにした。

困難な点は、具体例を上げることで、学生の理解を促した。

②①の結果はどうでしたか。

一部の学生には効果があったが、効果のない学生もいた。

③②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

初年次教育におけるアクティブラーニングの姿勢を身につける全学的な取り組みが無い限り難しい。効率的な教育体制の充実化を期待する。

6. 学生の学修成果（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

(参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。)

課題に対するポイントの説明、データサイエンスにおけるデータの扱いなどを説明し、サイエンスリテラシーの向上を目指している。いくつかの科目では、小論文課題を複数回提出させている。毎回の提出後、文章構成や書き方など、ポイントを説明。優秀な課題に関しては、実名をあげて紹介している。今年度も①難しい単語は、平易な言葉で再度説明した、②不明な点がないか、都度学生に意見を求めるようにした、③困難な点は、具体例を上げること、学生の理解を促した、を実施した。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

特に評価を得ていない。

7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況) (分量の目安: 1~2 行 (40 字~80 字))

ほぼ参加。同日参加が難しい場合は、録画を拝聴した。

8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。(分量の目安: 3~6 行 (120 字~240 字))

長期的目標: 全学的、組織だった初年次教育、アクティブラーニングを身につける姿勢の教育が必要不可欠。それを身に着けた上で、専門教育につなげてほしい。

短期的目標: 学力の低下している学生に対しての授業後のフォローアップ

9. 添付資料 (根拠資料) (※) 資料名のみ

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。

*特になし

参考

※ ティーチング・ポートフォリオにおける自己記述を裏付けるエビデンス例

(「実践ティーチング・ポートフォリオ スタータブック」(大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会 編)から引用)

(自ら作成するもの)

1. 授業に関するもの

シラバス, 小テスト, 宿題, レポート課題, 試験問題, 教材(配布資料, パワーポイント資料など)

2. 教育改善に関するもの

(教育に直接貢献する研究, FD プログラムなどへの参加記録, 教育の工夫を示すもの(複数年のシラバス等), 教育活動関連の補助金の獲得)

(他者から提供されるもの)

1. 学生から

授業評価データ, 授業に関するコメント(授業評価の自由記述やメールのやりとり等), 卒業生から授業や教育についてのコメント

2. 同僚から

授業参観の講評, 作成教材についての意見, 同僚のサポート実績

3. 大学/学会等から

教育に関する表彰, 教育手法等に関する講演の記録及び招聘の要請書類, カリキュラムやコースの設計などについての評価

(教育/学習の成果)

授業科目受講前と受講後の試験成績の変化, 学生の小論文・報告書, 学生のレポートの「優秀」「平均的」「平均以下」の例, 特に優秀な学生についての記録, 指導学生の学会発表などの成果, 学生の進路選択への影響についての事実, 学生のレポートの改善の軌跡